

北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（一）

―主たる底本―

佐々木 勇

（受理日二〇一九年十月三日）

〇、先行研究と本稿の目的

1. 北野経王堂一切経の底本に関する先行研究

応永十九年（一四二二）写本を主とする五〇四八帖の一切経が、京都の千本釈迦堂・大報恩寺に伝存する。一九八一年に国の重要文化財に指定された「北野経王堂一切経」（通称「北野社一切経」）である。

以下、北野経王堂一切経を、通称に従い、本稿でも北野社一切経と呼称する。左に、文化庁ホームページ「国指定文化財等データベース」の解説文を引用する。

この一切経は、応永十九年（一四二二）北野経王堂の覚蔵坊増範が発願、勸進僧となり、経王堂において三月十七日から八月十五日に至るおよそ五か月の短期間に書写した勸進一切経である。現存総数は五千四十八帖で、うち当初の応永書写経は四千八百十六帖、室町時代後期の補写経八十二帖、江戸時代補写経百五十帖を併せ存している。

書写には東は越後・尾張から、西は肥前・薩摩まで、二十五か国、二百余人の僧俗が参加しており、完成後は北野神社境内の輪蔵に納められた。

本経は、北野一切経会あるいは謡曲「輪蔵」で、洛中の人々に親しまれた一切経として知られている。

この北野社一切経の底本について、以下の論考が有る。公刊の早いものから掲げる。

①白井信義「北野社一切経と経王堂 ―一切経会と万部経会―」（『日本仏教』三号、一九五九年三月）。

②赤尾栄慶「書跡」（『千本釈迦堂大報恩寺』千本釈迦堂大報恩寺の美術と歴史）（二〇〇八年、柳原出版）所収。

③馬場久幸「北野社一切経の底本とその伝来についての考察」（『佛教学総合研究所紀要』二〇一三年二号、二〇一三年三月。後、『日韓交流と高麗版大藏経』（二〇一六年、法蔵館）に収載）。

論文①は、北野社一切経の分函法（経名および巻数の対応）を根拠に、北野社一切経の底本は「宋板湖州本」（思溪版）であることを明らかにした。また、高麗再雕版の刊記が書写されている『大般若波羅蜜多経』巻第五百三十一―四は高麗再雕版が底本とされた、とした。

論文②は、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』は一行十四字であり、高麗再雕版の刊記を写していることから高麗再雕版に基づくこと、他の底本は、開元寺版の刊記を転写したものがあること、巻末に音釈が付されていることから、開元寺版または思溪版「などの系統に属する版本や写本であった」、とした。

論文③は、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』が高麗再雕版に基づく根拠に、巻第五十一に高麗再雕版の柱刻が書写されていることを加えた。また、『大般若波羅蜜多経』の他にも一行十四字で書写された経典があり、それらは高麗版を書写したものである、とした。

右の先行研究によって、北野社一切経の底本について、次の点が明らかになった。

- 『大般若波羅蜜多經』は、高麗再雕版を底本とする。
- 『大般若波羅蜜多經』以外は、思溪版または開元寺版を底本とする。

2. 本稿の目的

先行研究①②③で、北野社一切経底本の概要が判明した。しかし、左の課題が残り、新たな課題も生じた。

- i. 北野社一切経『大般若波羅蜜多經』の主な底本が高麗再雕版であることとの、さらなる証拠はないのか。
- ii. 『大般若波羅蜜多經』以外の主たる底本は、思溪版あるいは開元寺版のどちらなのか。
- iii. 高麗再雕版・思溪版・開元寺版以外は、どのように利用されたのか。

本稿は、北野社一切経の底本を、先行研究より正確に、詳細に認定することを目的とする。

設定した目的の性格上、『北野経王堂一切経目録』および先行研究を本稿中で訂正ことがある。しかし、それが本稿の目的ではない。本研究は、先学の調査・研究なしには、進められなかった。先学による多くの学恩に、深く感謝する。

なお、紙幅の都合上、本稿は(一)として、主たる底本(課題 i・ii)に関して述べる。それ以外の底本(課題 iii)については、続稿に記載する。

本稿作成のため、大報恩寺(千本釈迦堂)現蔵の重要文化財「北野経王堂一切経」原本を、数日間に亘り、閲覧させて頂いた。閲覧に際して、御住職菊入諒如猥下にご高配を賜った。

また、本一切経との比較のため、増上寺・知恩院・醍醐寺・東寺・岩屋寺(愛知県知多郡南知多町)・瑞応寺(愛媛県新居浜市)・快友寺(山口県下関市)・海の見える杜美術館各蔵本の原本を閲覧させて頂いた。原本御所蔵の各寺・所蔵機関御当局ならびに国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・県・市教育委員会の皆様に、大変お世話になった。

本稿の初めに明記して、心より御礼申し上げたい。

一、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』の主たる底本

1. 北野社一切経『大般若波羅蜜多經』は一行十四字を原則とする

北野社一切経の応永十九年書写分『大般若波羅蜜多經』が原則として一行十四字で書写されることは、『北野経王堂一切経目録』(一九八一年、文化庁文化財保護部美術工芸課。以下、単に「目録」とも言う)にも記載され、公開されている部分写真でも、明らかである。このことから、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』は、開寶蔵の流れを汲む経本を底本としていることが知られる。ただし、『大般若波羅蜜多經』中に、『目録』が一行字数「十七字」とする卷が存する。

しかし、その内に、実際には一行十四字で書写されている左の諸卷が有る。

- 卷第十一、卷第二五一〜二五七・卷第三三九・五三八(首五紙江戸補写)以外)

次に、右の各卷について述べる。

ア. 卷第十一

『大般若波羅蜜多經』卷第十一には、「應永十九年(壬/辰)四月一日/於平安城北野宮寺染亮筆終書功訖/金剛佛子憲海」の書写奥書が存する。憲海は、191(千字文番号、以下同)難函『菩薩處胎經』、362友『阿毘達磨品類足論』なども書写している。

イ. 卷第二五一〜二五七

卷第二五一〜二五七の卷末には、「讚州道隆寺大貳賢信 餘」の書き込みがある。行末「餘」は、『大般若波羅蜜多經』卷第二五一〜二六〇の十卷二函に振られた千字文である。書写僧「賢信」の名は、輦函(千字文508)「俱祝羅陀羅尼經」等の帖末にも、「右筆讚州道隆寺 賢信」と見られる。賢信は、以下、第五〇九函・五一〇函をも写している。その第五一〇函第二帖「最上根本大衆金剛不空三昧大教王經 第二」の書写奥書には、「應永十九年(壬/辰)八月一日書之畢/右筆讚州道隆寺 賢信(生年/十九歲)」と生年を記す。

なお、『目録』は、この『大般若波羅蜜多經』卷第二五一〜二五七に音釈が有る、とする。しかし、これら諸卷に音釈は無い。

ウ. 卷第三三九・五三八

『大般若波羅蜜多經』卷第三三九には「應永十九年(壬/辰)卯月十五日書寫畢金剛佛子重舜」、卷第五三八には「北野宮一切経内/應永十九年(壬/辰)

三月 日 悲母聖如／右筆善勝」の書写奥書が有る。この二帖は、「大般若波羅蜜多経」巻第一（奥）「如法書寫大藏経之内初二函／應永十九年（壬／辰）三月十七日立筆本願寺聖人金剛資覺藏／翁慶公禪定門／阿波國法林寺範意筆」と同時・一連の書写経である。

これら、北野社一切経「大般若波羅蜜多経」のうち、一行十四字の書写経は、高麗再雕版の行取り・字詰と完全に一致する。

2. 『大般若波羅蜜多経』巻第五百三十一〜五百三十四に写された高麗再雕版刊記

版刊記

論文①②③は、北野社一切経「大般若波羅蜜多経」巻第五百三十一〜五百三十四に、高麗再雕版の刊記が写されていることを指摘する。

本経の書写刊記とは、左のものである。

〔巻第五三一〕 巳亥歳高麗國大藏都監奉／勅雕藏

〔別筆〕北野宮一切経内 應永十九（壬／辰）三月 日 慶賢

（以下、欠）

〔巻第五三二〕 巳亥歳高麗國大藏都監奉／勅雕藏

〔別筆〕北野宮一切経内／ 應永十九（壬／辰）年三月 日

承慶

善勝

〔巻第五三三〕 巳亥歳高麗國大藏都監奉／勅雕藏

〔別筆〕北野宮一切経内 慶賢／ 應永十九（壬／辰）年三月 日 悲母聖如

三月 日 悲母聖如

右筆善勝

〔巻第五三四〕 巳亥歳高麗國大藏都監奉／勅雕藏

〔別筆〕北野宮一切経内／ 應永十九（壬／辰）年三月 日

慈父隆運

右筆善勝

この刊記は、『大日本史料』第七編之十六（一九〇一年、東京帝國大學）や『北野経王堂一切経目録』にも翻刻されている。

高麗再雕版『大般若波羅蜜多経』巻第五百三十一〜五百三十四の原本刊記も、

〔巳亥歳高麗國大藏都監奉／勅雕藏〕である。

北野社一切経は、高麗再雕版の刊記を、改行まで正確に書写している。

その北野社一切経本文と高麗再雕版刊記とを写したのは、「右筆善勝」である。

〔善勝〕は、これらに続く巻第五三五〜五四〇までも書写している。巻第五三五の巻尾は、左のとおりである。

大般若波羅蜜多経巻第五百三十五

〔別筆〕一切経内 北野宮常住／ 應永十九（壬／辰）年三月 日

隨金

右筆善勝

北野社一切経「大般若波羅蜜多経」巻第五三五〜五四〇の諸巻も、高麗再雕版刊記は写さないものの、高麗再雕版の本文・改行位置と完全に一致する。

3. 北野社一切経が写した高麗再雕版の柱刻

論文③は、北野社一切経「大般若波羅蜜多経」巻第五十一に高麗再雕版の柱題が書写されていることを指摘し、その柱題は、「大般若第五十一 第 張 宙」である、とした。

しかし、これは、北野社一切経の柱題を省記したものである。

本一切経『大般若波羅蜜多経』巻第五十一に書写されている柱題は、左のとおりである。

〔大般若五十一巻第二張 宙〕「大般若經五十一巻 第三張 宙」〔大般若第五十一 第四張 宙〕「大般若經第五十一 第五張 宙」〔大般若第五十一 第六張 宙〕

右のごとく、「大般若」と「大般若經」、「五十一巻」と「第五十一」の、各二種が有る。

一方、高麗再雕版の柱刻は、左の如くである。

〔大般若第五十一 卷 第二張 宙〕「大般若經第五十一 卷 第三張 宙」〔大般若第五十一 第四張 宙〕「大般若經第五十一 第五張 宙」〔大般若第五十一 第六張 宙〕

すなわち、北野社一切経には、書写の底本とした高麗再雕版柱刻の「第」を省いた例が有る。

また、『目録』は、巻第四六一にも版心記が書写されていることを記す。

巻第四六一の原本には、「大般若經第四百六十一 第二張 崑／世真」〔大般若經第四百六十一 第三張 崑〕「大般若經第四百六十一 第五張 崑」、以下

若經第四百六十一 第三張 崑」〔大般若經第四百六十一 第五張 崑〕、以下

省いた例が有る。

また、『目録』は、巻第四六一にも版心記が書写されていることを記す。

巻第四六一の原本には、「大般若經第四百六十一 第二張 崑／世真」〔大般若經第四百六十一 第三張 崑〕「大般若經第四百六十一 第五張 崑」、以下

若經第四百六十一 第三張 崑」〔大般若經第四百六十一 第五張 崑〕、以下

省いた例が有る。

また、『目録』は、巻第四六一にも版心記が書写されていることを記す。

巻第四六一の原本には、「大般若經第四百六十一 第二張 崑／世真」〔大般若經第四百六十一 第三張 崑〕「大般若經第四百六十一 第五張 崑」、以下

若經第四百六十一 第三張 崑」〔大般若經第四百六十一 第五張 崑〕、以下

省いた例が有る。

「第十二張」まで同様の版心記が書写されている。第二張の「世真」については、次項で述べる。

本経『大般若波羅蜜多經』卷第四六一に写された版心記は、高麗再雕版の版心記と完全に一致する。

この版心記は、二十三行ごとに写されている。それは、高麗再雕版『大般若波羅蜜多經』卷第四六一の一紙行数が二十三行であり、一紙二十三行の板端に版心記が彫られているためである。

北野社一切経『大般若波羅蜜多經』卷第四六一は、底本とした高麗再雕版『大般若波羅蜜多經』卷第四六一の一紙毎に彫られた版心記を、そのまま書写した。そのため、版心記を写す位置は、北野社一切経の紙継位置とは合わない。

なお、高麗初雕版の『大般若波羅蜜多經』卷第四六一は遺存しないものの、卷第三五五と卷第四八一とは一紙二十五行で彫られており、再雕版と異なる。⁶⁾

4. 北野社一切経が写した高麗再雕版の刻工名

北野社一切経『大般若波羅蜜多經』卷第四六一の書写者は、高麗再雕版に彫られた刻工名「世真」をも、同経巻同箇所⁷⁾に書写している。

この刻工名「世真」も、高麗大藏経研究所のホームページ公開画像で確認できる。『大般若波羅蜜多經』卷第四六一に刻工名が彫られているのは、この第二張のみである。

北野社一切経『大般若波羅蜜多經』卷第四六一に刻工名「世真」が写されていることは、先行研究に指摘がない。

5. まとめ

以上、本章では、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』の底本について、左の諸点を述べた。

1. 底本の中心は、高麗再雕版である。
2. 卷第四六一にも、高麗再雕版の版心が書写されている。
3. 北野社一切経は、高麗再雕版の刻工名「世真」までも書写している。

二、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』以外の主たる底本

1. 北野社一切経『大般若波羅蜜多經』以外の主たる底本は思溪版である。北野社一切経は、宋版のうち、思溪版を「根幹とした一藏」を底本としたことが、先行研究^①に説かれた。その根拠は、北野社一切経の分函法が思溪版とのみ一致することである。

この根拠を否定することはできない。

ところが、先行研究^②は、『大般若波羅蜜多經』以外は一行の文字数十七字で書写されていること、北野社一切経中に開元寺版の題記を書写した巻が存すること、巻末に音釈が書写されていることから、「その底本は中国・福州版の「開元寺版一切経」や湖州で開板された「思溪版一切経」などの系統に属する版本や写本であったと考えてよからう。」と底本の候補を広げた。

しかし、開元寺版に巻末音釈は無い。宋版東禪寺版および開元寺版は、函毎に、独立した音釈帖が付されるのが原則である。

一方、思溪版に音釈帖は無く、音釈を各巻末に刻す。『大般若波羅蜜多經』以外の北野社一切経の大部分に、この思溪版の巻末音釈が書写されている。

この事実は、北野社一切経が思溪版を主たる底本としたことを、支持する。『大般若波羅蜜多經』以外の北野社一切経は、先行研究^①の指摘の通り、思溪版を主たる底本とする。その中に、開元寺版を写したものが混じている。

以下、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』以外の主たる底本が思溪版であることを、具体的に示す。

2. 一行十七字以外の思溪版を底本とした北野社一切経

思溪版の一行文字数は、原則として、十七字である。しかし、一行十七字ではない思溪版も、存する。

本項では、一行十七字以外の思溪版を書写した北野社一切経の何点かを指摘する。

ア. 「目録」が一行「十四字」とする経巻

○461辨「一切経音義」卷第二十一〜二十五、「十四字」・「室町」。

(以下、経巻名の下に「目録」が記す一行字数と書写の時代とを、「」と「」内に記す。)

『一切経音義』は、二字または三字を主とする被注語を大字で掲げ、その下に小字・割書で注を記す。この一行を何字と数えるかは、数え方によって異なる。『目録』は、『一切経音義』巻第一〜二十までを、「十七字」とする。大小字の区別なく文字を数えれば、一行十七字となる。

だが、すべて大字で書写したものとして換算すれば、一行十四字となる。『目録』は、『一切経音義』巻第二十一〜二十五の二行字数を「十四字」としている。『一切経音義』の一行文字数が『目録』内で異なるのは、当該巻調査担当者

の文字数算定方針の相違による。

いずれにせよ、北野社一切経『一切経音義』は、本文・行取り、大小字の配置等、すべて思溪版『一切経音義』と一致している。

イ. 『目録』が一行「十五字」とする経巻

○512 纏『御製佛賦 卷上下・御製詮源歌』、「十五字」・「江戸」。「御製秘藏詮 卷第三〜六・九・十（巻第二・八は欠帖）、「十五字」・「江戸・室町混在」。

『御製佛賦 卷上下・御製詮源歌』、『御製秘藏詮』巻第一〜十を、開元寺版・東禅寺版は531伊函に入れる。高麗版は、『御製秘藏詮』巻第一〜十を517車に収めるものの、『御製佛賦・御製詮源歌』は入蔵していない。

よって、北野社一切経の書写が、これらを512纏函に収める思溪版に基づくことは確実である。

『御製秘藏詮』、『御製佛賦・御製詮源歌』は、右の『一切経音義』同様、被注語を大字で掲げ、その下に小字・割書で注を記す。『目録』は、これら諸経の一行を十五字と数える。

北野社一切経『御製秘藏詮』巻第三〜六・九十は、思溪版の本文・行取りと一致する。

○111 平・112 章・117 臣『大方廣佛華嚴經』巻第十一〜十八・二十二〜二十六・二十八〜三十・七十二・七十六、「十五字」・「室町」。

○156 養『後出阿弥陀仏偈經』、「十五字」・「江戸」。

○342 奉『根本説一切有部毘奈耶陀那頌』、同『根本説一切有部毘奈耶雜事攝頌』、同『根本説一切有部毘奈耶頌』巻上・中・下、「十五字」・「室町」。

右諸巻は、思溪版でも一行十五字である。『大方廣佛華嚴經』は大きな文字で彫られ、奉函諸巻と養『後出阿弥陀仏偈經』とは、五字一句・三句一行・一行十五字の頌が続く。

右の北野社一切経がその思溪版を写していることは、思溪版の音釈をそのま

ま書写している点からも、知られる。

ウ. 『目録』が一行「十八字」「十八・九字」とする経巻

○542 且『宋高僧伝』巻第一・二、「十八字」・「室町」。

開元寺版・東禅寺版・高麗蔵は、本経を収録していない。

思溪版の『宋高僧伝』巻第一・二は、一行十八字を基本とする。本経の書写は、この思溪版に依拠する。

○453 鼓『大唐内典録』巻第九、「十八・九字」・「室町」。

本録巻第九は、「歴代衆經要轉讀録第四」であり、序文から始まる。

思溪版は、本巻序文を、第一行は十八字、第二行は十九字で開始する。

北野社一切経も、その思溪版の一行字数通りに書写を始めた。そのため、『目録』は「十八・九字」と記した。

北野社一切経『大唐内典録』巻第九は、思溪版の巻末音釈も写している。

以上、思溪版にも、一行十四字・十五字・十八字・十九字などの経巻が存する。

そして、北野社一切経は、それらを一行十七字に統一することなく、底本とした思溪版の行取りのままに書写している。

3. 開元寺版を底本とした北野社一切経

北野社一切経に、開元寺版一切経の題記が写されていることは『目録』にも記載され、先行研究②は、開元寺版が底本であることの根拠とした。

『目録』および論文②が記す102發函の『大集譬喻王経』・『大哀経』と152常函『諸法本無経』の巻頭に開元寺版の刊記が転写されていることは、本稿の筆者も、原本で確認した。

しかし、北野社一切経における開元寺版は、あくまでも思溪版を補足するために用いられている。

以下、そのことを、各経について具体的に示す。

本一切経書写における開元寺版の使われ方を見ることで、『大般若波羅蜜多経』以外の主たる底本が思溪版であることが、より確実となる。そのため、主たる底本について述べる本稿に、底本の中心ではない開元寺版を写した経について記す。

ア. 102發函『大集譬喻王経』

『大集譬喻王経』に写されている開元寺版題記のうち、巻上の題記四行は、巻頭に張り継いだ短冊状の別紙に写されている。左が、その北野社一切経に写

された開元寺版題記である。

福州管内衆縁就開元禪寺雕造毘盧大藏經印板一副計五百餘函恭爲／今上皇帝祝延聖壽内外臣同資祿位都會首顏徽曾縉毅張嗣林杓陳芳林／劉居中蔡康國陳詢蔡俊劉漸陳靖謝忠前管句沙門本悟見管句沙門僧仔／證會前住持本明見住持淨慧大師超當山三殿大王大聖泗洲時宣和六年八月日謹題

画像公開されている書陵部蔵本の同経にも同じく「宣和六年（一一二四）八月日」の題記が見られる。比較すると、北野社一切経に脱字・誤写かと思われる部分が存するものの、両者同文であり、改行位置も同一である。

書写された経本文も開元寺版本文に一致し、思溪版とは異なる。

北野社一切経は、『大集警諭王経』巻下巻頭にも、巻上とは同文の開元寺版題記を写す。

北野社一切経『大集警諭王経』巻下の経本文も、思溪版とは異なり、開元寺版本文に一致する。

ところが、巻下には、帖末音釈が存する。

開元寺版に帖末音釈は、無い。本一切経は、開元寺版音釈帖の音釈を移写したものと疑い、音釈の内容を比較してみた。が、北野社一切経が写しているのは、開元寺版音釈帖の音釈ではなく、思溪版の帖末音釈であった。本文・改行位置とも、思溪版帖末音釈と全同である。

『大集警諭王経』上・下に書写與書は存しない。しかし、巻上巻末に「大願主覺藏法印」、巻下巻末に「執筆有覺土州」の書き入れが見られるため、この両帖も、応永十九年の書写であろう。

右の本経書写の実態から、応永十九年の一切経書写時には、思溪版の帖末音釈を書写することが標準となっていた、と考えられる。

イ. 102發函『大哀経』

102發函『大哀経』の巻頭に開元寺版題記が写されているのは、巻第一のみである。この巻第一尾題後にも、「執筆有覺／大願主覺藏法印」の書き入れが存する。よって、応永十九年の書写本である。

この巻第一巻頭に引かれた開元寺版題記は、左の、咸淳四年（一二六八）補刊時の捨銭刊記である。

福州開元禪寺印経院謹募十方檀信刊補毘盧大藏經開板恭爲／當今 皇帝祝延 聖寿文武官僚同増祿算恩施檀那各隨心願報資／恩有者 時咸淳四年戊辰六月化縁首座僧 端光 謹題

だが、この『大哀経』巻第一にも、同経巻第二・巻第七と同じく、開元寺版に存しない帖末音釈が書写されている。

『大哀経』は、開元寺版と思溪版との音釈の内容が極めて近い。しかし、小異が存し、北野社一切経102發函『大哀経』の帖末音釈は、思溪版のそれと完全に一致する。

では、開元寺版捨銭記と思溪版帖末音釈とを留める、北野社一切経『大哀経』巻第一は、開元寺版または思溪版の、どちらの経本文を写したのであろうか。三者の経本文を比較すると、左の異同が見られた。原本調査で気づかれた例を記す。

大正蔵所在	北野社一切経	思溪版	開元寺版
130409a29;	照乎夜闇	(同上)	照千夜闇
130410b16;	解脱三逕跡	(同上)	解脱三逕路
130410b17;	則以慈哀故	(同上)	則以慈哀杖
130413a17;	有神「補入符」光曜	有神光曜	有神 曜
1304130d3;	慕戀梵天上	(同上)	慕戀梵天王

右のごとく、北野社一切経の最終本文は、思溪版と一致する。

「最終本文」としたのは、北野社一切経は、先ず開元寺版本文を写しているからである。

その後、思溪版本文と校合し、両者異なる場合は思溪版の本文に改めた。

具体的には、字形が似ている場合、「干」に「乎」を、「杖」に「故」を上書き訂正し、上書き訂正困難な場合は、「路」を擦り消して「跡」を、「王」を擦り消して「上」を書いている。思溪版が開元寺版より一字多い箇所0413a17には、補入符を記した上で、「光」を補入している。

この校合は、本文書写とほぼ同時期になされたもの、と見られる。すなわち、本文書写時に、何らかの事情で思溪版が用意できなかったために開元寺版を写し、思溪版を入手後、校合・修正した、と考えられる。

ウ. 152常函『諸法本無経』

152常函『諸法本無経』の開元寺版題記は、北野社一切経の巻上と巻中とに記される。「靖康元年（一一二六）」のそれである。巻中の題記が原本の行取りに近いため、それを引く。

福州管内衆縁就開元禪寺雕造毘盧大藏經印板一副計五百餘函恭爲／今上皇

帝祝延聖壽内外臣僚同資禄位都會百葛龜／年鄭康曾／結「ママ」陶穀張嗣林
 柳陳芳林昭劉居中蔡康／國陳詢蔡俊臣劉漸陳靖謝／忠前管句本悟見管句僧
 任證會前任持本明見住持淨慧大師法超／當山三殿大王大聖泗洲時靖康元年
 六月 日 謹題

この『諸法本無経』巻中には、応永十九年の書写・校合奥書が存する。巻上は、巻中と同筆と見られる。両巻に帖末音釈は、無い。

北野社一切経『諸法本無経』巻上・巻中の経本文を、開元寺版および思溪版と比較すると、開元寺版に一致する。よって、題記のみならず、開元寺版本文を書写したものである。

しかし、巻下は、巻上・中と別筆である。開元寺版題記も、写されていない。巻下奥書は、「文亀元年辛酉八月十四日城州梅尾於橋坊／書畢（以下略）」とある。文亀元年（一五〇一）に、梅尾橋坊にて書写した『諸法本無経』巻下が、「北野天神宮寺」に収められた。

経本文の比較結果は、左のとおりである。

大正蔵所在	北野社一切経	思溪版	開元寺版
150769b27:	願顛倒平等故	(同上)	諸顛倒平等故
150772a01:	頭多功德	(同上)	頭陀功德
150773b22:	名密無垢	(同上)	名蜜無垢

巻下は、思溪版を書写している。

八十九年後に補写する場合も、『諸法本無経』三巻の底本を開元寺版で揃えようとはせず、下巻のみは、北野社一切経が底本と定めた思溪版を書写している。

以上、思溪版が北野社一切経の基本的な底本であったことを示すため、北野社一切経における開元寺版書写本の実態を見た。

本項では、北野社一切経における開元寺版は、思溪版が入手できなかった場合に使用され、それは、思溪版による書写・校合までの臨時的な処置であった、と推測した。

開元寺版を底本とした北野社一切経は、他にも存する。それらについては、続稿に記す。

4. まとめ

本章では、北野社一切経『大般若波羅蜜多経』以外の底本について、左の点を述べた。

1. 底本の中心は、思溪版である。
2. 北野社一切経は、底本とした思溪版の字詰め・行取りのとおりを書写している。
3. 開元寺版は、思溪版が得られなかった場合に、臨時的に底本とされたものである。

三、結び

以上、北野社一切経の底本をより確かにすることを目的とした本稿の結論は、次の通りである。

1. 北野社一切経『大般若波羅蜜多経』の主たる底本は、高麗再雕版である。
2. 北野社一切経『大般若波羅蜜多経』以外の主たる底本は、宋版思溪版である。

本稿は、1の根拠を増やし、2の結論をより確実なものとした。

高麗再雕版・思溪版以外の北野社一切経底本については、続稿で述べる。

【注】

- (1) 『大日本史料』第七編之十六、『北野経王堂一切経目録』、『北野社書写一切経 増伴と増範』（一九九四年、大内町文化財保護審議会）、『千本釈迦堂大報恩寺の美術と歴史』（二〇〇八年、柳原出版）、『国宝重要文化財大全 7』（一九九八年、毎日新聞社）、『特別展 京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ』（二〇一八年十月、東京国立博物館・読売新聞社）などに掲載された写真。
- (2) 香川県多度津町に残る真言宗醍醐派大本山「道隆寺」の僧名には、他に、「賢真」「少輔」などが見られる。この両僧は、応永六年正月から始まる「若王寺大般若経」の書写も行っている（『若王寺所蔵大般若波羅蜜多経調査報告書』（東かがわ市歴史民俗資料叢書2、二〇〇七年））。

(3) ただし、東國大學校の一九五八年四月影印本には、巻第五三八最後の一行「作大饒益」が無い。高麗大蔵経研究所のホームページ画像で本来の姿を

- ご確認願いたい。北野社一切経は、高麗再雕版最終行の「作大饒益」を書写している。
- (4) 東國大學校の複製本、または http://kbsutra.ekr/rik_eng/index.do で確認可能である。
- (5) 巻第五三一は、善勝の署名が有ったであろう行以降が残っていない。
- (6) 『高麗大藏經初刻本輯刊』(二〇一二年、西南師範大學出版社) 第一卷、参照。なお、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』は、柱刻紙数を一貫して「第〇張」と写している。この点からも、高麗版のうち、再雕本を底本とすることが知られる。高麗初雕本は、柱刻紙数を「第〇丈」とすることが多く、その中に、漢数字のみ・「第〇」・「第〇幅」・「第〇張」を混じて彫る。
- (7) 宋版の東禪寺版・開元寺版・思溪版は、分函の仕方が近い。しかし、相違が存する。
- たとえば、北野社一切経は、480英函内に『開元釋教錄略出』に続けて『紹興重彫大藏音』を写す。また、545函から『大般涅槃經』(三十六卷本(南本)・曇無讖譯、慧嚴・慧觀・謝靈運再治)を収める。
- これに一致するのは、思溪版である。東禪寺版・開元寺版は、『紹興重彫大藏音』・南本『大般涅槃經』とも入蔵しない。
- (8) この帖末音積の方式は、思溪版以降、元版にも引き継がれる。
- しかし、思溪版に続く積砂版からの中国版本一切経には、函順千字文の下に函内の通番が漢数字で刻される。ところが、北野社一切経には、基本的に、千字文下の漢数字が無い。この点は、注(1)の諸本に掲載された写真でも確かめられる。

The Original Text of the Buddhist Canon from Kitanokyōdō Hall（北野経王堂一切経）（1）
— About the main original text —

Isamu Sasaki

Abstract : The Buddhist Canon from Kitanokyōdō Hall（北野経王堂一切経） were written in 1412.

The purpose of this paper is to clarify those original texts.

My research led to the next conclusions.

1. Most of the original text of Dai-Hannya-kyō(大般若経) is the Korai saichouhan(高麗再雕版).
2. Most of the original text of besides the Dai-Hannya-kyō (大般若経) is the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版) .
3. The center account (版心記) of Dai-Hannya-kyō (大般若経) 461st of the Korai Edition of the Buddhist Canon (高麗再雕版) was copied by this Buddhist Canon (北野経王堂一切経) .
4. Se-Shin (世真) which was the name of the Buddhist Canon (高麗再雕版) engraver was also copied .
5. When there was not the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版) , Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経開元寺版) was used secondarily.

Key words: the Buddhist Canon from Kitanokyōdō Hall, the Korai Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon

キーワード : 北野経王堂一切経, 高麗一切経再雕版, 宋版一切経思溪版, 宋版一切経開元寺版